

まつ 松 林 遺 跡

1. 所 在 地 高松市多肥上町1187ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年5月19日～11月8日
4. 調査面積 約1,000m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 大嶋和則
6. 調査の原因 通学路
7. 調査結果の概要

遺構面は弥生時代と古代～近世の2面存在し、それぞれ多くの遺構、遺物を検出している。

まず、古代～近世の遺構面では、香川郡の一
条と二条の条界となる溝、坪界溝など条里地割
を検出している。また、それに平行するよう
に流れれる近世の護岸工事を施した溝などを検出し
ている。

次に弥生時代の遺構面では、弥生中期の竪穴住居4棟、幅4mの後期の大溝、前期の集石遺
構をはじめ、多数の土壌やピットなどを検出している。また、調査区東端では縄文晩期の土器
片を含む自然河道も検出している。さらに、7ヶ所で大地震の痕跡である液状化現象（噴礫）
も見られた。

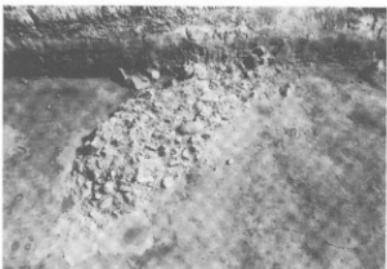
8.まとめ

今回検出した噴礫は遺跡で検出した事例としては全国で4例目のものである。通常液状化と
いえば噴砂を思い浮かべるが、最大径20cmの礫が地山を引き裂いて下から噴き上がっていた。
噴礫直上に弥生中期の土器を供獻していることからこの時期に地震が起きたと思われる。

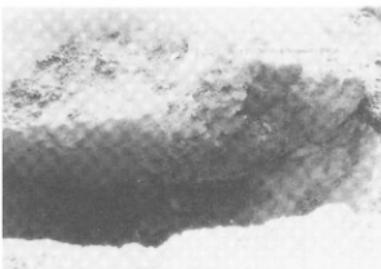
液状化現象は震度6以上で起こるとされており、高松市内でそれ以上のものとなると、長尾
断層、中央構造線、南海地震（宝永の南海地震のように特に大きいもの）のいずれかである。
それぞれの地震の活動時期と比較してみると100～150年周期で起こる南海地震に比定するこ
ができると思われる。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 噴礫検出状況（平面）



第3図 噴礫検出状況（断面）

ひぐらし まつばやし
日暮・松林遺跡

1. 所在地 高松市多肥上町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年7月31日～9月29日
4. 調査面積 約780m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会
　　山本英之 中西克也
6. 調査の原因 都市計画道福岡・多肥上線建設
7. 調査結果の概要

本遺跡は、県立高松桜井高校の南東側に位置し、平成6年の試掘調査に基づき調査が行われた。その結果、溝状遺構5本と旧河道1本を検出した。

SD01は、調査区中央より南側に検出され、方向は北東～南西である。その幅は約30cm、深さ20cmであり、底面には木樋を伴っていた。木樋は、底板と側板をコ字状に組み、非常に薄い蓋板が中に落ち込んでいた。木樋の幅は14.5cm、高さ11cm、板の厚さ0.5～2cmであり、遺存状態は良好である。SD02～04は小規模な溝である。SD05は現有水路のため完掘できなかったが、幅1.2m、深さ40cmを測る。方向は東西で、その位置は条里地割の坪界線に当たっている。

旧河道は、調査区の南西から北東方向に蛇行しながら流れている。幅は約8mで、最深部の深さは約1.5mを測る。埋土は大きく3層に分けられ、上層からは13世紀に比定される黒色土器A類の碗や土師器・瓦器が多量に出土した。下層は小～中碟を多量に含み、ほぼ完形に近い10数点の須恵器が集中して出土した。土器は総じて遺存状態が良い。

8.まとめ

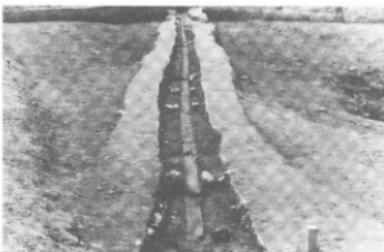
本遺跡は平成5年より数次に分かれて調査を実施している継続調査であり、本年度の調査区が南端部分である。本年度の遺構密度は非常に希薄であるが、旧河道より多量の土器の出土があった。この旧河道は、6世紀頃より埋まり始め、最終的に埋没するのは13世紀初頭である。しかし、この地形は現在の景観にも影響を残しており、調査区の東側に微高地が確認される。今後も遺跡周辺における調査の必要性が非常に高い。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 旧河道遺物出土状況



第3図 木樋検出状況

宮尻上遺跡

1. 所在地 高松市多肥下町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年2月6日～3月29日
4. 調査面積 約200m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 文化財調査事業
7. 調査結果の概要

調査は、山田香川郡界線の位置確認の目的で実施した。郡界線は、南海道と共に高松平野の条里施工の基準にされたと考えられ、条里プラン復原の重要な基線である。調査区は、現用の水路等構造物の制限を受けずに郡界線を横断するように、旧河道によって条里地割の乱れた水



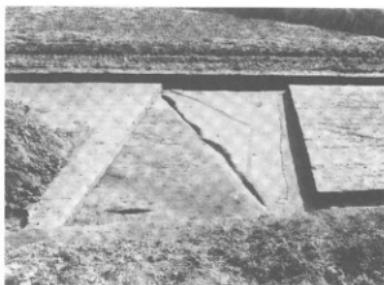
第1図 遺跡の位置（「高松南部」）

田に東西長25～32m、南北幅8mに設定し、人力により掘削した。調査によって、溝状遺構3（弥生後期）、水田畦畔1（時期不明、近世か）、土器片数点が出土した。溝状遺構は、幅約50cmで東北流する旧河道地割の中央から東よりに掘削され、旧河道伝いまたは旧河道から微高地に導水するためのものと見られる、検出幅約4m、深さは60cm前後で鋭いV字の断面形を呈し、下層に灰色粗砂、上層に黒色シルトを充填し、双方に遺物が混入する。

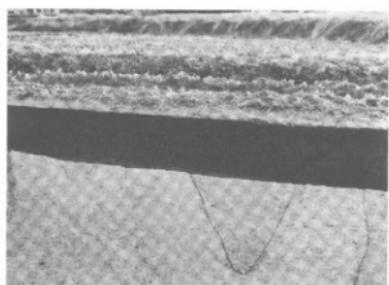
水田畦畔は、現地表面から約40cmの深さで検出し、検出幅1m強、盛上りは5cm足らずでは南北に直伸する。調査区南辺の微高地縁辺では、微高地に沿った南東方向にやや幅細の畦畔2本が支脈状に分岐する。遺物による時期確定はできなかった。

8.まとめ

南北畦畔は、時期的には不明確ながらも、位置的には山田香川郡界線にはほぼ一致する。郡界線は同時に弘福寺領山田郡田図の西界にも当たると思われることから、今後さらに詳細な検討が必要である。



第2図 郡界畦畔検出状況



第3図 同左拡大ならびに土層

みやじり いっかく
宮尻・一角遺跡

1. 所在地 高松市林町42番地19ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年12月8日～3月8日
4. 調査面積 約460m² (256×1.8m)
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山元敏裕
6. 調査の原因 市道拡幅工事
7. 調査結果の概要

平成7年度工事予定地について調査を行ったが、調査地は北側に現有道路が存在するため、調査区は拡張する部分の幅1.8m、延長256mの細長いトレンチ調査となった。遺構は弥生時代前末期から近代にわたる時代のもので、溝、土坑、竪穴状遺構、凹地状遺構、旧河道、神社参



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）

道等多数の遺構を確認した。検出した遺構のうち1区で検出した凹地状遺構は幅13.0m、深さ0.7mの規模を持つもので、出土遺物から大きく弥生時代後期と8世紀頃の時期に分かれ、弥生時代後期の層の最下層ではクロボク層が確認されており、凹地でありながら湿地状ではなく、比較的高燥であった状況が認められた。また、この遺構はポーリング調査の結果、調査区より南側15m程度の地点で完結していることが判明した。

8.まとめ

今回の調査地周辺では空港跡地遺跡、一角遺跡、弘福寺領田園比定地遺跡南地区等で発掘調査が行われており、ほぼ、その成果に沿った状況が確認された。ただ、1区で確認した8世紀段階と考えられる凹地状遺構と同時期の遺構は周辺地域では確認されておらず、この時期の遺構としては当該地では初めてである。今回の調査区ではいずれの遺構も東西の規模は判明したものの狭小なトレンチでは南北の状況が今一つ明確ではないことより、今後の周辺の調査に期待するところが大きい。



第2図 1、2区完掘状況



第3図 土坑遺物出土状況

みたにちょうなんかいどう
三谷町南海道推定地

1. 所在地 高松市三谷町1060番地
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年12月4日
～平成8年3月30日
4. 調査面積 70m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 文化財調査事業
7. 調査結果の概要

調査地点は、現在の地割で南海道の道代が幅約10mの余刺帯として認められる東西線上に位置する。調査区は旧小作川西岸に形成された1mほどの段丘を挟んで上下段に、各1箇所を設定し、西側（段丘上）を第1Tr、東側（段丘下）を第2Trとした。

調査の結果、第1Trでは現地表面から約70cmに戰後の客土、それ以下約70cmに天幅約5.8m、地面幅3.2mの逆台形に開削され花崗岩風化土の地山が存在し、この内部に4層の堆積を確認した。いずれも洪水堆積と見られ、第3層は水田層である。第2Trでは旧河道による風化花崗岩砂礫の最終遺構面上に、第1Trと同様に整形された40cm程の段差が北側のみ確認できたが、対応する南側は調査区内では確認できなかった。砂礫層直上には段差部分をレンズ状に被覆する灰色シルトを介して第1Trと対応する水田層が広がり、それ以上は5～6層の中近世水田層を経て現地表に至る。遺物は出土していない。

8. まとめ

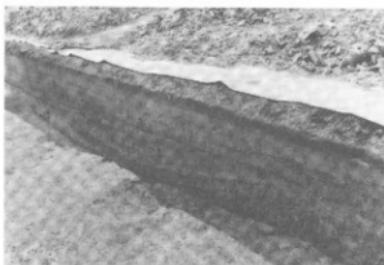
発掘調査によって明らかになった地山整形の痕跡は、人為的な可能性が高いものと考えられる。一般に古代の官道が低丘陵や段丘にさしかかる箇所でオープンカットによる路面整形が施されることは吉野ガ里遺跡でも確認されており、本例も同様な可能性が高いと思われる。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 南海道道路敷検出状況



第3図 第2Tr道路敷北肩の段差の状況

かみ にし はら
上 西 原 遺 跡

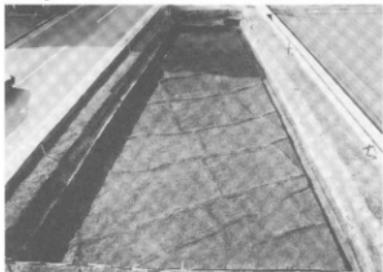
1. 所在地 高松市木太町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年12月15日
～平成8年3月31日
4. 調査面積 約1,200m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 山本英之
6. 調査の原因 土地区画整理事業
7. 調査結果の概要

遺跡は高松平野の中央部、木太新池（通称大池）のすぐ北側に位置し、西は大池放水口（本ユル）、東は弘福寺領讃岐国山田郡田図の比定地の一角が隣接する。調査は道路予定地の南北幅12m、東西約100mについて実施した。

遺跡西半は現木太新池本ユル付近を本流とす
る旧河道の氾濫原に属し、不安定な土地条件ながら2面の水田面を確認した。上層は灰褐色シルト層で現地表下約50cmで検出したが、現代の攪乱による削平で数本の畦畔を確認したにとどまった。堆積から中世のものと思われるが、伴出遺物は得られていない。一方、下層の水田層は旧河道東半緩傾斜面上で、現地表下60～80cmに黒色シルト層として認められた。水田は5×10m前後の整然とした小区画の部分と、畦畔等の施設を伴わない部分の二様が見られ、後者についても層中の炭化物の含有によって水田耕作の形跡が容易に窺われた。調査区東半は微高地部分に移り、土地条件としては安定的な様子が窺われたが、数本の溝状遺構が確認されたのみで伴出遺物は見られなかった。

8.まとめ

本遺跡で確認した2枚の水田層は、出土遺物による時期決定に不確定な部分が残るが、灰褐色シルトの上層水田、黒色シルトの下層水田という重なりは木太新池を挟んで南約800mに位置する浴・長池遺跡、弘福寺領田図北地区調査区でも見られ、それぞれ中世、弥生前期と考えられている。このことから木太新池周辺の広範囲で弥生前期から水田が営まれていたと推定できる。



第2図 小区画水田全景



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第3図 同左大畦畔全景

かわ 川 南 遺 跡

1. 所在地 高松市春日町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年10月17日～18日
4. 調査面積 約10m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会
　　山本英之 中西克也
6. 調査の原因 都市計画道室町・新田線建設
　　に伴う試掘調査
7. 調査結果の概要

調査地は、高松平野を流れる河川の一つである新川の西側に当たる。現状は畑地・駐車場であるため、調査は畑地部分の非常に狭い範囲で実施された。試掘トレーニチは、畑の区画に沿つて東西方向に設定した。その長さは8.3m、幅



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）

1.2mを測り、現地表より1m下の川砂層において遺構を検出した。基本層序は、大きく3層に分けられる。第1層は現耕作土、第2層は擾乱（以前建っていた住宅を取り壊した際の擾乱で、現地表より約60cm下まで達している）、第3層は新川の自然堤防を形成する川砂層で、細かく分層される。確認された遺構は溝状遺構であり、トレーニチの東端で検出された。幅は約50cmで、深さは5cmを測り、南北方向に延びている。埋土は白色砂層で、遺物の出土はなかった。この遺構確認面より下位の遺構の有無を確認するためにトレーニチ西端を約40cm掘り下げたが、遺構・遺物の検出はなかった。地盤にまで達していないが、湧水と川砂のため崩落の危険性があり、掘り下げを中止した。

8.まとめ

今回の試掘調査では、近世と考えられる溝状遺構1本と川砂層中より数点の瓦器片が確認されただけにすぎないが、本調査区の西方で以前に行なった室町・新田線の試掘調査において多数の溝、土坑、柱穴等が検出されており、遺構の広がりが本調査区まで達していることが確認された。原因者との協議の結果、平成8年度に事前調査を実施する予定である。



第2図 遺跡全景



第3図 トレーニチ完掘状況

わか みや ほん むら
若宮本村地区

1. 所在地 高松市新田町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年4月19日～5月2日
4. 調査面積 581.5m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会
山本英之 中西克也 末光甲正
6. 調査の原因 都市計画道室町・新田線建設
に伴う試掘調査
7. 調査結果の概要

調査地は高松平野を形成する河川の一つである新川の東側に位置する。現況は水田・畑地である。周辺の地形分析によれば、新川の旧河道が幾筋も蛇行しながら流れ、その間は多量の堆積物による三角州となっている。東側は土石流扇状地帯であり、緩やかな傾斜で高くなっている。

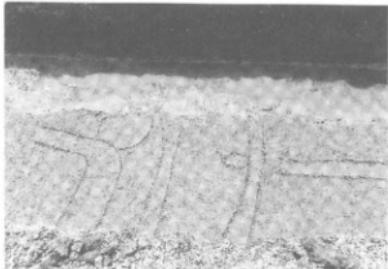
調査はトレント方式を採用し、西側より第1～第12トレントを設定して調査を行った。第1～3トレントは洪水による堆積物の中～粗砂が厚く堆積し遺構・遺物の検出は非常に僅かであった。第4トレントでは旧河道と白色粗砂を充填する溝3本を検出した。第5・6トレントでは現水田直下で細い溝を2本検出した。第7トレントより以東では砂の堆積は少なくなり、極細砂上面で2本の溝を検出し、第8トレントでは多数の跡跡が検出された。第9～12トレントではシルト質極細砂の遺構面が数面あり土坑・ピット・溝等が多數検出され、土器の出土も多い。特に、第12トレントでは奈良～平安時代の遺構面が4面確認された。

8.まとめ

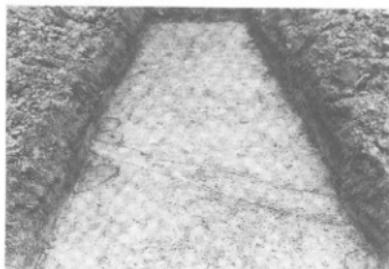
今回の試掘調査の結果、新川に近い地域では遺構・遺物の検出は希薄であり、検出された溝等は近世のものと考えられる。東側の扇状地帯に近づくにしたがい、奈良～平安時代と近世の遺構・遺物が数面にわたり多数確認された。原因者との協議により、平成8年度に事前調査を実施する予定である。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 第9トレント



第3図 第10トレント

おくほうの坊遺跡

1. 所在地 高松市高松町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成7年12月4日
～8年2月9日
4. 調査面積 約2,000m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 大嶋和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園（仮称）
7. 調査結果の概要

高松市東部の龍王山塊から西へいくつも派生する尾根によって形成される谷状地形の中でも最大の谷部分（奥の坊）に所在する。運動公園整備予定地内の試掘調査で、谷状地形の中で108ヶ所のトレンチ調査を行った。

平地部分は谷状地形であるため、検出遺構もほとんど無く、自然河道を検出したにすぎない。堆積は深く、地山まで到達できなかつたが、調査地の西端で中世～近世の土師器や陶磁器をはじめ、若干ではあるが須恵器も出土している。

また、谷を開むように存在する北と南の丘陵部分においては、そこからさらに谷に向かって派生する小丘陵上において後期古墳を2基（大空古墳・金川測古墳）確認している。いずれも石材が露出した状況であった。

8.まとめ

独立した谷状地形の中で自然河道中に遺物の流入が認められることから、集落の存在が想定できる。特に、現在集落の存在する北側丘陵部分の緩斜面において「元屋敷」という地名も残っており、この地区に存在する可能性が高い。

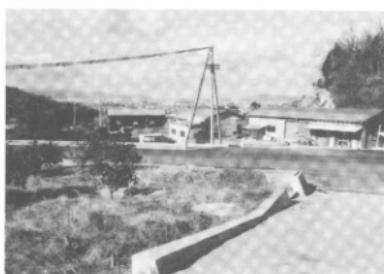
その他、県下の弥生後期の標識遺跡として著名な大空遺跡周辺においても数本のトレンチ調査を行つたが、花崗土の採取により遺跡の大部分がすでに消滅しており、ピットを数個確認したのみで、その他の遺構はほとんど見られなかつた。遺物には弥生後期の土器、石器などがみられた。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」「度志」）



第2図 土壌完掘状況



第3図 大空遺跡現状

かながわぶち 金川渕古墳

1. 所在地 高松市高松町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年2月26日～3月15日
4. 調査面積 約300m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 大嶋和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園（仮称）
7. 調査結果の概要

龍王山塊の最北端から西へ伸びる尾根よりさらに派生した丘陵の先端部分(96.0m)に立地する。現状では尾根に斜行するように花崗岩が2点並んでいる。



第1図 遺跡の位置（「高松南部」「志度」）

表土直下で地山を検出しておらず、盛土は認められなかった。古墳は尾根上に立地するため、尾根と墳丘の境に尾根方向のみ幅1.30mの周溝を確認している。この周溝から推定すると、径10.00mの円墳と思われる。墓壙は地山を掘り込んでいた。石室を構成していたと思われる石材は露出していた2点のみしか検出していないため、規模等は不明である。

その他の遺構として墳丘上および墳丘裾部分に土壙がみられた。墳丘上にみられた土壙には炭が多くみられ、須恵器片なども伴っている。

8. まとめ

検出した花崗岩は、石室東側側壁の基底石に当たると思われ、石材が南北方向に並んで見えることから石室は南に開口していたと思われる。須恵器の壺の破片が出土しているが、古墳の築造時期を決定するまでには至らない。

また、周辺部分は開墾などによって削平が著しいが、尾根上および南側斜面において数ヶ所トレンチ調査を行った。しかしながら他の古墳などの遺構はみられなかった。



第2図 石材露出状況



第3図 SK01完掘状況

おおぞら 大空古墳

1. 所在地 高松市高松町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年2月14日～23日
4. 調査面積 約150m²
5. 調査担当者 高松市教育委員会 大嶋和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園（仮称）
7. 調査結果の概要

龍王山塊から西へ伸びる尾根からさらに派生した小丘陵の頂上（75.5m）に立地する。現状では北半部分が削平を受けており崖面となっており、安山岩の板石と花崗岩が露出している。

調査の結果、幅約1.25mの周溝が馬蹄形に巡っており、径8.50m、周溝を含めた全長は約



第1図 遺跡の位置（「高松南部」「志度」）

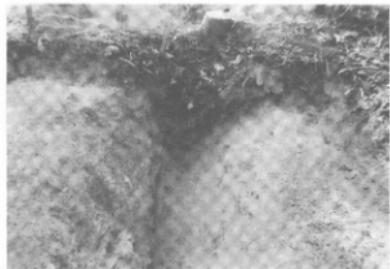
11.00mの円墳と推定される。周溝は東側で途切れており、その部分には東より墓道がのびている。墓道の延長部分が石室となるが、すでに崩壊しており、規模等は不明である。墳丘には一部盛土が残存する部分もあるが、ほぼ流出してしまっていた。

遺物も少なく、墓道から1点、周溝から2点、計3点の須恵器の壺の破片が出土したにすぎない。

8. まとめ

表面に露出している3点の花崗岩の角石は主体部に使用されたものと思われるが、原位置を保つものではない。その花崗岩の下で崖面に刺さるようにして存在した安山岩の板石は、墓道の底のレベルとほぼ同じで、その延長部分に当たることから石室床面の敷石に使用されたものと思われる。詳細な時期決定ができないが、古墳時代終末期のものと思われる。

また、丘陵の南側斜面を中心に周辺部分に確認のためトレンチを設定したが、他の古墳の存在は確認されなかった。



第2図 墓道完掘状況



第3図 石室崩壊状況

にし うらたに 西浦谷南地区遺跡

1. 所在地 木田郡三木町大字池戸字西浦谷
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成7年10月12日
4. 調査面積 約20m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査に至る経過

今回の調査は西浦谷遺跡の所在する丘陵の南に位置する遺跡で、高松東道路建設に伴い民有地の地下げが行われることから試掘調査を実施した。



第1図 遺跡の位置（「志度」）

7. 調査の概要

地下げが予定されている1,250m²に対し、センターに直交する形でトレンチを2本設定した。第1トレンチでは表土下15~20cmで地山となるが、この面から円形の竪穴住居を一棟検出した。また、東へ約20mの位置に設定した第2トレンチでは、隅丸方形の竪穴住居を一棟検出した。堆積土層は暗黄色砂質土の單一層であり、遺物は検出されなかった。

8. 調査のまとめ

平成7年度における調査により西浦谷遺跡は弥生時代後期初頭の集落が丘陵頂部を中心として広範囲に広がっていることが確認されているが、今回の試掘調査により丘陵の南斜面にも展開していることが判明した。三木町北部における同時期の集落遺跡として知られる鹿伏・中所遺跡や前後する時期の白山3遺跡、高松市久米池南遺跡等との関係が重視される。（石井）



第2図 第1トレンチ



第3図 第2トレンチ

にし ど い 西 土 居 遺 跡 群

1. 所在地 木田郡三木町大字井戸字西土居
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成7年4月1日～
4. 調査面積 約7,000m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 工場用地造成
7. 調査結果の概要

調査対象地は3つの調査区に分かれる。A区は小規模な谷部に相当し、その南尾根の北斜面をS-A区としている。また、B区は昭和57年に調査が行われた地区より南西に続く尾根稜線の調査区で周知の6号墳も含まれる。A区では5世紀末から6世紀中葉の古墳を8基、同一遺構面で弥生時代後期のピット群及び土坑を検出した。S-A区では方形台状墓、15号墳を検出した。前者は、弥生時代中期後半の遺構で主体部は東西方向を主軸とする土壙で東部からガラス小玉、土器片を数多く検出している。また、削平により遺構の約3分の2は残存していないが、東西約5m南北3mのマウンドが残存していた。盛土裾部は小児頭大の塊石を2～3段に積み上げた列石をもち周囲には溝を巡らせていく。後者は、右片袖式の横穴式石室を主体部とし玄室部は3層にわたる礫床を確認している。また、最低2度は追葬が行われたようで、その都度、礫を敷き詰めたと思われる。初葬は出土須恵器から6世紀末頃に行われている。15号墳の西の包含層からは紡錘車を検出した。碧玉製で複合鋸齒文の文様が刻まれている。B区からは尾根に対し直交するもの、平行するもの合わせて27基の土壙墓と壺棺7基とともに土壙墓群間の境界を画すると思われる溝も検出した。土壙墓の中には方形の周溝をもつものも見られ小児頭大の塊石の転落が見られた。

8.まとめ

井戸地区は派生する多くの尾根上に周知の古墳、墳墓が数多く点在する。今回の調査では弥生時代中期後半から終末期にかけての方形台状墓、土壙墓、壺棺群を検出し、古墳発生に至る墓制の変遷を考えるうえで貴重な資料が得られた。新川を挟んで東側の丘陵頂部に位置する丸井古墳との関係が注目される。A区の古墳群は主体部構造は判明しなかったが代々の首長が継続して古墳を営んだことを示しており、古式群集墳の形成過程を知りうる好資料である。S-A区、B区からは、それに続く古墳を検出しているが、2号→15号→6号の築造順が考えられる。15、6号はいずれも畿内型の構造をもち、碧玉製紡錘車が出土したことと共に畿内政権との密接な関係を示す特徴として注目される。



第1図 遺跡の位置（「鹿庭」）

写真1 土壙墓群（北西から）



写真2 方形台状墓（南から）

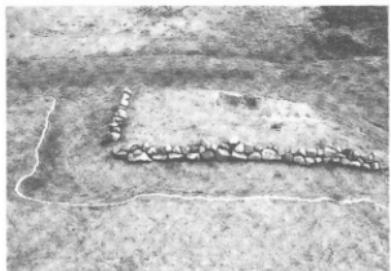
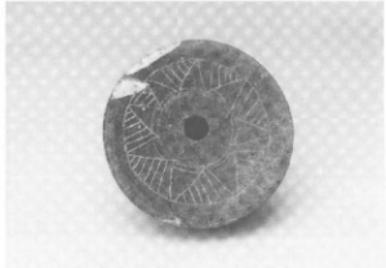


写真3 15号墳玄室部（西から）



写真4 紡錘車



花池尻遺跡

1. 所在地 大川郡志度町大字志度
字花池尻・字藤井
2. 調査主体 志度町教育委員会
3. 調査期間 平成8年2月7日～9日
4. 調査面積 70m²
5. 調査担当者 高島 豊（大川広域）
6. 調査の原因 町道藤村西線改良事業
7. 調査結果の概要

当該地区は、条里型地割の残る志度平野の南西端に位置している。調査対象地区の東半部は志度条里の端にかかっており、乱れてはいるが条里型地割の痕跡が認められるのに対し、西半



第1図 遺跡の位置（「志度」）

部は地形的にやや高くなつており条里型地割は全く認められない。

事前の分布調査において土器の散布が認められたため、9箇所のトレンチを設定して試掘調査を行った。調査の結果、対象地区東半部は耕作土直下が砂層になっており、若干の中世の遺物が出土したほかは、何の遺構も発見できなかった。西半部では70～100cmの堆積層の下から柱穴および偶蹄目と思われる動物足跡を検出した。足跡を検出した箇所は水田であった可能性が高いと考えられる。堆積層の下部は平安後期から鎌倉時代にかけての包含層となっている。

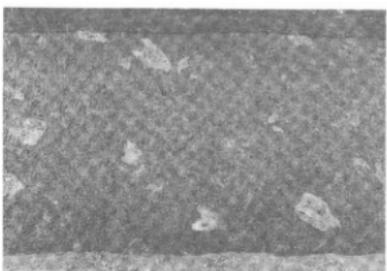
8.まとめ

調査の結果、対象地区内に古代末～中世の遺跡が存在することが明らかになった。発見箇所は、条里の認められない箇所であるが、中世以降の厚い堆積層があることから、本来条里型地割が存在したことでも十分考えられる。なお、対象地区西半部については、平成8年度に志度町教育委員会が主体となって発掘調査を行う予定である。

（高島）



第2図 調査対象地区全体



第3図 動物足跡

寺尾古墳群

- 所在地 大川郡志度町大字鴨部字猿橋
- 調査主体 志度町教育委員会
- 調査期間 平成7年7月20日～10月26日
- 調査面積 1,500m²
- 調査担当者 高畠 豊（大川広域）
- 調査の原因 鴨部南部地区土地造成事業
- 調査結果の概要

寺尾古墳群は志度町鴨部と寒川町神前の町境にある低山塊に分布している古墳時代中期を中心とする古墳群である。

20～22号墳は鴨部平野側に張り出した尾根上に立地している。20号墳は主体部の粘土椁（残存長4m）を検出した。副葬品は盗掘によりほとんど失われており、碧玉製管玉と鉄器がわずかに出土したのみであるが、調査後、この古墳からかつて小型の鏡および玉類が出土したとの情報を得た。土壤の流失が著しく進行しているため、墳形は明らかにできなかった。21・22号墳については21号墳が存在するとされていた箇所で、土壤墓1基が検出されたが他に墳墓遺構は検出されなかった。23号墳は南隣の尾根先端部に位置し、造成が直近まで及ぶ予定であるため確認調査を行った。その結果、古墳周溝と考えられる溝が検出されたが、溝のカーブから別の古墳の溝である可能性が考えられ、24号墳として取り扱うこととした。溝内からは朝顔形を含む円筒埴輪および須恵器が出土している。墳丘は完全に削平されているが一辺16m程の方墳と推定された。出土した須恵器から5世紀後半の年代が考えられる。

8.まとめ

寺尾古墳群については、これまで分布の主体である寒川町側についてのみ明らかにされており、志度町側においては初めての調査であった。同古墳群中の盟主的な古墳としては家形埴輪などが出土した神前古墳が知られていたが、今回の調査で明らかになった20号墳・24号墳はこれよりも先行・後行する盟主墳の可能性が考えられる。

（高畠）



第1図 遺跡の位置（「志度」）



第2図 24号墳周溝



第3図 20号墳主体部粘土椁

おさきにし西遺跡

1. 所在地 大川郡長尾町東
2. 調査主体 長尾町教育委員会
3. 調査期間
平成7年4月21日～7年5月15日（1次）
7年12月11日～8年2月15日（2次）

4. 調査面積 約650m²（1次） 約970m²（2次）
5. 調査担当者 長尾町教委 吹田健児（1次）
調査指導者 文化行政課 森下英治（1次）
調査担当者 大川広城 萬木一郎（2次）
6. 調査の原因 民間土地造成に伴う事前調査
7. 調査結果の概要

1次調査は平成4年度の県道高松長尾大内線建設に伴う発掘調査において、弥生時代前期～後期の集落、また古代の建物群が検出された調査区に接している。調査の結果、弥生時代後期の堅穴住居4棟、溝1条などが検出され、古代の建物跡は当該調査区まで広がるものではないことが確認された。

2次調査地は極楽寺東古墳の西および北側の隣接地で、試掘調査の結果古墳の周濠が確認されている箇所である。調査の結果、一部で後世の削平を被るもの、古墳を概ね円形に取り巻く形状で周濠が確認され、埋土中より多数の須恵器が出土した。墳丘西側周濠から出土する須恵器は壺身・壺蓋が多数で、北側周濠では大型の壺ないし壺が出土している。なお、西側周濠からは通常主体部に副葬される馬具が出土していることから、埋葬主体は横穴式石室で、石室の攪乱・盗掘に伴って石室前部に掻き出された遺物群が西側周濠に埋没したものと考えられる。石室の開口方向は西側であることがほぼ確定的である。

8.まとめ

当遺跡における民間造成工事に伴う発掘調査は、平成6・7年度の合計3次にわたる調査で一応終了した。今後、調査成果の整理を継続し、調査報告をまとめる予定である。

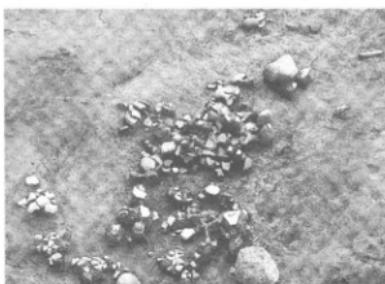
（森下・萬木）



第1図 遺跡の位置（「度志」）



第2図 1次調査状況



第3図 2次調査 周溝遺物出土状況

りょう 陵 遺 跡

1. 所在地 大川郡長尾町大字名
2. 調査主体 長尾町教育委員会
3. 調査期間 平成7年11月7日～14日
4. 調査面積 175m²
5. 調査担当者 高畠 豊（大川広域）
6. 調査の原因 県住宅供給公社による宅地造成事業
7. 調査結果の概要

事業予定地は、扇状地が小河川によって開析されて生じた低い台地地形であり、付近には辛立遺跡・尾崎西遺跡が所在している。これまで周知の埋蔵文化財包蔵地とはなっていなかつたが、事前の分布調査の結果、土器や中世陶器の散布が認められ、また中世の石塔が水田畔に上にあるなど遺跡の存在する可能性が高いと判断されたため、15箇所のトレーンチを設けて試掘調査を行った。調査の結果15箇所全てにおいて竪穴住居、溝、柱穴群などの遺構が検出され、出土遺物より弥生時代中期から近世初頭にいたる複合遺跡が存在することが確認された。

8.まとめ

調査対象地区の西側谷部には湧水点があり、かつては豊富な水量があつて下流ではこれを利用した水田も多くあったようである。湧水をおさえる位置にあたることが、各時代の集落が立地する上で有利であったものと思われる。一方、遺跡が展開する台地上は現在水田地帯となっているが、このような景観がどの時期に成立したのかが問題となる。平成8年度に町教委が主体となり、事業予定地内の道路部分および浄化槽部分について本調査が行われることになったが、各時代における台地上の土地利用状況と集落景観の解明が期待される。

なお遺跡は、調査対象地区の北側にも広がり、尾崎西遺跡に連続すると共に南側にもさらに広がっていると思われる。今後、開発事業の実施にあたっては十分な保護措置が必要である。

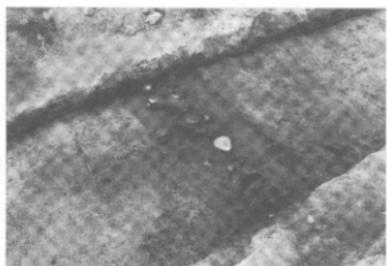
(高畠)



第1図 遺跡の位置（「志度」）



第2図 竪穴住居・柱穴検出状況



第3図 溝内土器出土状態

きたやま おつい
北山・乙井地区（北山遺跡・八坂墳墓群）

1. 所在地 大川郡長尾町造田
是弘・造田乙井
2. 調査主体 長尾町教育委員会
3. 調査期間 平成7年10月25日
～平成8年1月31日
4. 調査面積 約1,500m²
5. 調査担当者 高畠 豊（大川広域）
6. 調査の原因 工業団地造成事業
7. 調査結果の概要

北山遺跡は、南西側に開いた谷の谷頭部に位置し、前年度の試掘調査の結果古代に遡る包含層およびピット群が検出されていた。今回の調査では、ピット群は発見できず古代・中世の遺物を若干含む土による整地層と、これに掘り込まれた近世の暗渠状の溝を検出するにとどまった。

八坂墳墓群は造田平野に半島状に突き出た丘陵の最高所に立地する。前年度の試掘調査時に板石等の散布が認められたため墳墓の存在が予想されており、今回確認調査を行った結果発見された。墳墓群は竪穴式石室1基および型式のそれぞれ異なる配石土壙墓4基を中心として土器棺墓・箱式石棺墓で構成される。これらのうち竪穴式石室と配石土壙墓群は、いずれもその規模が似通っており、主軸を尾根に直交させつつ一列に並行して築かれている。一部は盜掘されており、かつて勾玉が出土したともいわれるが、調査では副葬品は全く出土しなかった。また墳丘や、明確な区画施設は検出できなかった。

8.まとめ

八坂墳墓群は、土器の出土が僅少であったため築造時期の推定が難しいが、おおむね弥生後期後半から庄内期までのいずれかの時期に築かれたものであろう。この時期の竪穴式石室を有する墳墓としては、雨滝山山麓の大川町大井遺跡と寒川町奥10号墓がある。型式をそれぞれ異なる墓が整然と築かれるという墳墓群中心部の構成は、造墓集団の集団構成を示すものとして注目される。

（高畠）



第2図 竪穴式石室



第1図 遺跡の位置（「志度」）
(1: 北山遺跡、2: 八坂墳墓群)



第3図 八坂墳墓群全景

いし 石 仏 遺 跡

1. 所在地 大川郡大川町富田中
2. 調査主体 大川町教育委員会
3. 調査期間 平成7年7月1日～8月31日
4. 調査面積 約800m²
5. 調査担当者 萬木一郎（大川広城）
6. 調査の原因 県営は場整備事業
7. 調査結果の概要

調査対象地は四国最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳の北側、津田川にかけての段丘面上である。県文化行政課による試掘調査によつて遺跡範囲が確定され、事業実施によって削平



第1図 遺跡の位置（「志度」）

を受ける範囲や水路が敷設される地区を中心に調査区を設定した。調査区は石仏Ⅰ～Ⅱ区、富田茶臼山古墳の周庭帯、塚3基の5地点である。

調査の結果、縄文時代晩期の溝と考えられる遺構、13～14世紀頃の集落跡、18～19世紀の塚3基の成果があげられる。縄文時代晩期の溝状遺構は5×5mの調査区で検出したもので、突帯文土器のかサヌカイト製の石器、結晶片岩製の磨製石斧などが出土した。13～14世紀頃の集落跡の遺構はピットを中心とするもので、少なくとも掘立柱建物1棟が復元される。土師器の椀、小皿類が多量に、また、硯片、中国製陶磁なども出土している。塚は2基が水田の中に1基が畦に五輪石の部材や安山岩塊石を積み上げたもので、近世後半と考えられる遺物が出土している。

この他、富田茶臼山古墳の周庭帯と考えられる地割の外周部に調査区を設定し調査したが、後世の攪乱によって明確な遺構は検出されなかった。



第2図 調査風景



第3図 遺物出土状況

しろとり 白鳥廃寺

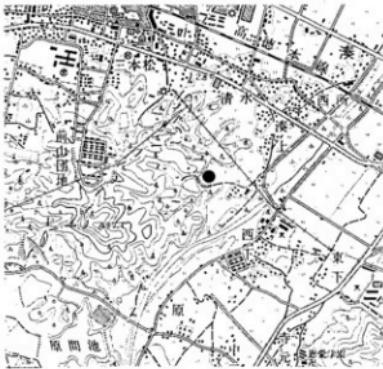
1. 所在地 大川郡白鳥町漆1191番地他
2. 調査主体 白鳥町教育委員会
3. 調査期間 平成6年11月28日～30日(第1次)
平成7年10月23日～27日(第2次)
4. 調査面積 300m²(第1次)・100m²(第2次)
5. 調査担当者
白鳥町教育委員会 橋本 守(1・2次)
大川広域事務組合 萬木一郎(第2次)
- 調査指導
文化行政課 森下英治(第1次)
6. 調査の原因 町営団地建設(第1次)
町道拡幅工事(第2次)
7. 調査結果の概要

廃寺は漆川の河口部に向かって北東方向に延びる小尾根が形成した谷の入り口付近に立地する。第1次調査は廃寺の南丘陵とその南に広がる平坦地を、第2次調査は廃寺の南縁部を対象として地下遺構の有無の確認を目的としたトレーニングを行ったものである。

第1次調査では合計8箇所のトレーニングを設定した第1次調査の結果、寺院に南接する丘陵では遺構は確認されず、丘陵の土地利用がなされていなかったことが判明した。丘陵南の平坦地では漆川の氾濫による厚い砂層の堆積を確認し、かつては寺院の至近に幅広の河川域が存在したことが明確となった。丘陵北東先端裾では護岸跡の側面を確認した。地山を一部削出し10～20cm大の円礫積を基礎として、外表に40cmほどの大礫を配して丘陵裾から河口に向かって波戸状に突出させる構造物である。出土遺物は皆無で、残念ながら護岸跡の所属時期は不明瞭であるが、古代まで遡るものであれば、寺院と古代漆の関係を想起させる重要な資料となる。

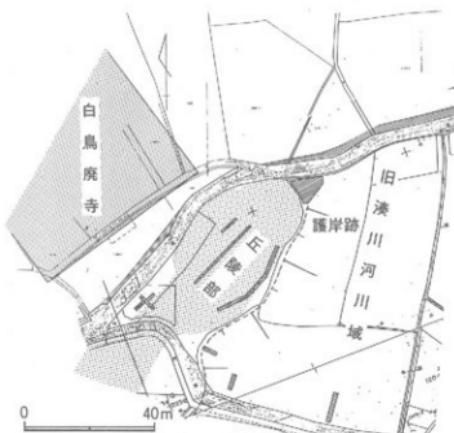
第2次の中院南縁の調査では、既往調査で推定された寺域の外区を南縁線に沿ってトレーニングを開闢した。その結果、地表下には厚い青灰色砂～シルト層が確認され、流路状の堆積状況を示した。護岸跡は検出されず、現町道下部に収まる可能性が高いことから、幅5mほどの規模が推定できた。出土遺物は皆無である。

調査結果を照合すると、白鳥廃寺周辺を取り巻く地形環境が次第に明らかとなる。現在寺院跡の南西には、谷を堰き止めた小規模な溜池が存在する。溜池の築造時期は不明であるが、今回の調査で寺域の南縁に流路が検出されたことから、寺院建立に当たって谷水の流れを固定する水路設定がなされていることが推定される。南門の前面は、そのような水路が取り付いていた可能性が高い。また、水路の南に位置する丘陵は、漆川の氾濫による寺域への被害をくい止める地形的要塞であり、寺院立地条件の一つの要素と考えてよいだろう。護岸跡が古代まで遡るものであれば、漆川河口部との接点となる寺域東側を保護する役割を果たした可能性がある。このように寺域東側は臨海部に立地する当寺院の性格を検討する上で重要な場所である。



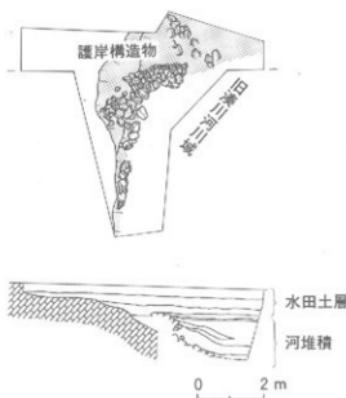
第1図 遺跡の位置（「三本松」）

(森下)



※ 斜線部第1次調査・濃網部第2次調査

第2図 トレンチ配置図



第3図 護岸跡実測図



第4図 調査地近景



第5図 護岸跡



第6図 護岸跡基礎石積



第7図 護岸跡から寺城東側を望む

馬宿畑方遺跡

1. 所在地 大川郡引田町馬宿字畑方
2. 調査主体 引田町教育委員会
3. 調査期間 平成8年1月29日, 30日
4. 調査面積 100m²
5. 調査担当者 高島 豊 (大川広域)
6. 調査の原因 農業集落排水事業黒羽地区処理施設の建設
7. 調査結果の概要

調査対象地区は馬宿川下流右岸の微高地の北東端にあたり、標高5m、海岸からは300mほどの位置にある。微高地の中心部には、現在㈱光洋精工引田工場が立地している。

調査は9カ所のトレンチを設定して行ったが、微高地上でビット群を、微高地末端部の斜面か

ら奈良時代～平安時代初期の包含層を検出した。ビット群は包含層よりも新しい時期のものである可能性もある。包含層からは、須恵器・土師器のほか焼塩用の製塩土器がまとまって出土しており注目される。

8.まとめ

今回の試掘で出土した焼塩用製塩土器は内面に布目がみられるもので、形態の推定できるものを観察したところでは、円筒形丸底もしくは砲弾形を呈するものであったと思われる。この形態の製塩土器は、北部九州の製塩遺跡や畿内の都城遺跡のほか、西日本各地で類例が知られつつあるが、県内においては初例であろう。本遺跡の立地上、製塩が行われていた可能性を考えられるが、馬宿地区を古代の南海道引田駅の所在地に比定する意見もあるため、駅関係の遺跡の存在も考慮しておく必要がある。

調査対象地区南側一帯においても、住宅建設時などに土器が出土したと伝えられており、南側の微高地全域に遺跡が広がっていると考えられる。

なお、平成8年度に引田町教育委員会が主体となって発掘調査が行われる予定である。

(高島)



第1図 遺跡の位置（「引田」）



第2図 調査風景

3. (財)香川県埋蔵文化財調査センター発掘調査状況

1. 調査の概況

(1) 国事業に伴う発掘調査事業

本年度の国事業に伴う発掘調査は3事業、6遺跡の調査を行った。1つは国道11号バイパスである高松東道路（三木～津田間）建設に伴うもので、三木町西浦谷遺跡、志度町幸田遺跡、津田町野牛古墳、志度町末3号窯跡の4遺跡を調査した。

西浦谷遺跡は平成6年7月に試掘調査が行われ、弥生時代の集落遺跡が展開していることが判明した。このため、丘陵中腹から頂部にかけての12,672m²が調査対象とされ、本年度はこのうち10,400m²を調査した結果、弥生時代後期前半の竪穴住居跡、掘立柱建物跡や、古墳時代後期の横穴式石室を検出した。

幸田遺跡の試掘調査は平成6年6月に行われ、縄文土器包含層や焼土面が検出されたため、1,600m²が調査対象とされた。調査の結果、自然河川跡が検出され、縄文時代後期の土器細片が出土した。

野牛古墳は以前からその所在が知られていた古墳で、明治時代に玉類の出土が伝えられていた。調査の結果、箱式石棺が検出され、内部より珠文鏡や管玉・勾玉・臼玉などが出土した。

墳丘盛り土はわずかしかなく、墳形は確認できなかった。時期は出土遺物から中期初頭前後と思われる。

末3号窯跡は平成3年度に窯体部分の調査が実施され、7世紀中頃の登り窯が確認されているが、物原・灰原は窯体東にある池の中に広がると予想されたため、この部分の発掘を工事施工に伴い本年度実施したものである。調査の結果、窯体下方向において、溝跡、テラス状遺構、土坑が検出され、窯体の周囲60mの範囲に関連遺構が広がることが明らかになった。

以上、本年度の4遺跡の発掘調査終了をもって高松東道路三木～津田間の埋蔵文化財発掘調査の現地調査はすべて完了したことになる。

2件目の事業は三木町池戸郵便局建設に伴う砂入遺跡の調査である。本遺跡の試掘調査は香川県教育委員会文化行政課によって平成6年9月7日に実施され、その結果弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が検出されたため、本年度に発掘調査を実施することになった。調査面積は当初1,600m²であったが、工事内容との再調整の結果2,070m²となった。調査の結果、弥生時代中期前半の竪穴住居跡、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器棺、古墳時代中期の竪穴住居跡などが検出された。

3件目の事業は四国工業技術研究所増設事業に伴う空港跡地遺跡発掘調査である。空港跡地遺跡の発掘調査は、県の整備事業に伴い平成2～6年度に大規模に実施されているが、今回の調査は四国工業技術研究所の施設増設に伴う小規模なものであったが、周辺の調査結果からは予測できなかった古代末の掘立柱建物群跡をはじめ、他に土坑、井戸跡も検出され、この周辺で確認されている集落、居館跡を検討するうえで貴重な資料が得られた。

(2) 県事業に伴う発掘調査事業

平成7年度の県道関係埋蔵文化財発掘調査（県道埋蔵文化財発掘調査業務）は、平成7年4月1日に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、調査に着手した。今年度の発掘調査は、県道改良工事に伴うものとして、高松市百相坂遺跡、小山・南谷遺跡、兀塚遺跡、志度町八丁地遺跡、大川町寺田・産宮遺跡の5遺跡、河川改修工事に伴って善通寺市弘田川西岸遺跡、区画整理事業に伴って高松市高松城跡（西の丸町）の発掘調査を直営方式で実施した。なお、弘田川西岸遺跡は、当初計画時点では1年間の予定で着手したが、期間を11月末までの8カ月間の調査へ変更し、また小山・南谷遺跡では調査面積の追加増に伴い調査期間を2カ月増の7月1日から11月30日まで5カ月間に変更して実施した。高松港頭土地区画整理事業に伴う高松城跡（西の丸町）の発掘調査は、年度当初は予定していなかったが、鬼無地区の港頭地区関係の調査を対象地を変更して、4カ月間で実施した。

県道三谷香川線道路改良工事に伴う高松市百相坂遺跡の発掘調査は1,400m²を調査対象として、平成7年4月1日から6月30までの3カ月間で実施した。発掘調査では、弥生時代後期以降の水田跡と中世の塚の一部と考えられる集石遺構等を検出した。この内、調査前が水田である調査区東半の微高地上で検出した塚の基礎部と考えられる集石遺構から、中世において微高地上においては、ベースが砂礫層ということもあり、水田開発はまだなされていない。現在、この地域の微高地上の灌漑が、南部の平池や舟岡池の大型溜め池を利用したものであることから、今回の発掘調査で、この地域の水田開発の状況等を考古学的に予見し得る資料が得られた。

県道高松志度線道路改良工事に伴う高松市小山・南谷遺跡の発掘調査は、平成5年度から実施しており、今年度で3年目となる。調査は用地買収との絡みもあり概ね東の丘陵よりの地区から進めてきている。今年度の当初は平成7年7月1日から9月30までの3カ月間で、2,038m²を対象として実施する計画で、発掘調査に着手したが、隣接する県道塩江屋島西線の西側の用地買収があり、県教育委員会文化行政課の試掘調査の結果、埋蔵文化財包蔵地であることが確定した結果、当初計画に追加して発掘調査を実施することとなり、調査面積を2,654m²、調査期間を11月30日までの5カ月間に変更実施した。発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての条里坪界に相当すると考えられる東西方向の溝3条とともに昨年度に引き続いて掘立柱建物跡・井戸等を検出した。また変更後の追加調査となった県道塩江屋島西線以西においても坪界の溝は西へ延びていることや集落域がやや様相を異にして続くことなどが明らかとなった。発掘調査では、古墳時代以降の集落跡とともに、埋没河川内から中世の水田跡を検出した。

県道高松志度線道路改良工事に伴う大川郡志度町八丁地遺跡の発掘調査は、平成6年度に着手しており、平成7年度の発掘調査は、昨年度調査区に隣接する区画で、7月1日から8月31日までの2カ月間で、165m²を対象として実施した。発掘調査では、集落域に隣接する旧流路が対象となっており、弥生時代以降の遺物が流路内の堆積層中から出土している。

県道三木国分寺線道路改良工事に伴う高松市兀塚遺跡の発掘調査は、平成7年9月1日から平成8年3月31日までの7カ月間で、5,000m²を対象として実施したが、対象地内の宅地部を平成8年度に調査を実施することとなったため、平成7年度の調査面積は、4,680

m²となった。発掘調査では古墳時代・中世の集落跡と中世の埋没河川内の水田跡等を検出した。

県道富田西志度線道路改良工事に伴う大川郡大川町寺田・産宮通遺跡の発掘調査は、平成7年度から平成8年度までの継続予定の調査であり、平成7年8月に計画準備を行い、現地発掘作業は平成7年10月1日から平成8年3月31日までの期間で実施した。平成7年度調査対象面積は4,404m²で、平成8年度に1,544m²を対象として実施する予定である。発掘調査では、弥生時代後期の包含層中より、小型鐵製鏡のほか奈良時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物等を検出した。

弘田川河川改修に伴う弘田川西岸遺跡の発掘調査は、平成7年4月1日から平成8年3月31日の予定で発掘調査を実施する計画であったが、着手後遺構密度の希薄な箇所が確定したため面積の変更と共に調査期間を短縮し、年度当初から11月30日までの8カ月間で調査を実施した。弘田川西岸遺跡は、四国農業試験場・国立普通寺病院等を中心として広がる旧練兵場遺跡群の一つである。特に弘田川の北側の地区については、彼ノ宗遺跡と連続するものであるが、調査対象地の明確化のため主要調査区である南部の弘田川西岸部の名称を遺跡名として代表させている。今回の発掘調査では、大型の掘立柱建物を伴う弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡を検出した。

高松港頭土地区画整理事業に伴う高松城跡（西の丸町）の発掘調査は、当初同じ区画整理事業関係の高松市鬼無・香西南町の操車場予定地の発掘調査を実施する予定であったが用地買収延期により、計画変更により実施することになった。調査期間は平成7年12月1日から平成8年3月30日の4カ月間、調査面積は900m²である。対象地は高松城跡西外曲輪に相当し、近世生駒藩・松平藩の上級家臣団の屋敷地に当たる。発掘調査では、松平藩大老大久保家の礎石建物・石組み溝、生駒～松平初期にかけての礎石建物・櫛列等を検出した。

（3）県教委事業に伴う発掘調査事業

平成7年度の県教委事業の埋蔵文化財調査は3件である。1つは高校新設事業に伴う鹿伏・中所遺跡の調査、2つは陸上競技場建設に伴う平池南遺跡の調査、3つは歴史博物館建設事業に伴う高松城跡の調査である。3遺跡ともに昨年度からの継続事業で、本年度が最終年度にあたる。

鹿伏・中所遺跡の本年度の調査対象面積は2,350m²を測る。調査は平成7年4月より南校舎・南水路部分から着手し、次に自転車置場へと抜け、最後に店舗移転の問題で着手できなかった東水路の一部の調査を実施し、同年9月末日に終了した。南校舎・南水路は昨年度に調査した北校舎より拡がる弥生時代中期～古墳時代前期の集落域と、集落の南辺に流れる自然河川、自転車置場は集落の東辺を流れる自然河川及び溝等の遺構が検出された。本年度の調査で最も注目されるのは溝の中から出土した多量の遺物と、自然河川の下層で検出した壠状の遺構である。

平池南遺跡の本年度の調査は、陸上競技場の北側スタンド部分を中心に実施した。調査対象面積は4,000m²を測る。調査は平成7年4月より開始し、同年6月に終了した。本年度の調査では、縄文時代晚期・弥生時代前期・後期・中世の遺構・遺物を検出した。縄文時代晚期の遺構は流路、柱穴、土坑、石器集積遺構等を検出した。弥生時代の遺構は柱穴、

土坑、溝、井戸、土器溜り、流路等の昨年度より拡がる集落域の延長部分を検出した。中世の遺構は基幹水路と考えられる大溝、大溝より分岐する小溝数条を検出した。特に注目できるのは縄文時代晚期の流路、弥生時代前期の多量のサヌカイト片を含む廃棄土坑等である。

歴史博物館の予定地は、高松城東の丸跡に想定される地区である。東の丸跡は、昭和60・61年度に実施した香川県民ホール建設に伴う調査において、中世より近代にいたる数期の遺構面及び、その遺構面上からは古図に記載されている建物遺構等を確認している。建設予定地はその南隣に位置する。

本年度の調査対象面積は5,000m²を測る。対象地は大別すれば東の丸跡と、東の丸跡の東辺に南北に配された堀跡に分けられる。なお、東の丸跡の東辺には、東辺を画する石垣を検出した。現地調査は平成7年4月より開始し、平成8年3月末日に終了した。当初は東の丸跡部分より開始し、次に堀の部分へ調査を拡げた。なお、堀の調査に際しては鋼矢板を打設し、調査を実施した。東の丸跡からは、中世より近代にいたる数期の遺構面及びその遺構面上に展開する礎石建物、石列状遺構、石組溝、井戸、水溜状遺構等を確認した。これらの遺構は生駒氏築城以前より明治の廃城に至るまでの資料であり、貴重な調査成果となった。また、対象地内の石垣は、一部を現状保存し、他の主要部分は復元を前提にした解体作業を実施した。

2. 遺跡別発掘調査結果の概要

(1) 国事業に伴う発掘調査事業

遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構	遺物
西浦谷	三木町池戸	10,400	平成7年4月1日～ 8年3月30日	堅穴住居跡・掘立柱建 物跡・土坑・横穴式石 室	弥生土器・石器・須恵器
幸田	志度町志度	500	平成7年8月1日～ 7年9月30日	自然河川跡	縄文土器・土師器
野牛古墳	津田町神野	500	平成7年10月1日～ 7年11月30日	箱式石棺	珠文鏡・管玉・勾玉・白 玉・土師器類
末3号窯跡	志度町末	500	平成8年12月1日～ 8年2月4日	溝跡・テラス状遺構・ 土坑	須恵器
砂入	三木町池戸	2,070	平成7年4月1日～ 7年7月31日	堅穴住居跡・掘立柱建 物跡・溝跡・土器棺	弥生土器・土師器・須恵 器・鉄器
空港跡地	高松市林町	2,780	平成7年12月1日～ 8年3月31日	掘立柱建物跡・溝跡・ 土坑・井戸跡	土師器・陶磁器・竹製品

(2) 県事業に伴う発掘調査事業

遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構	遺物
百相坂	高松市仏生山町	1,400	平成 7年4月1日～ 7年6月30日	掘立柱建物跡・水田跡 ・石組遺構	土師器・須恵器
小山南谷	高松市新田町	2,654	平成 7年7月1日～ 7年11月30日	条里坪界溝・井堰・井戸跡 ・掘立柱建物跡	土師器・須恵器・小型素紋鏡・金環
八丁地	志度町志度	165	平成 7年7月1日～ 7年8月31日	埋没河川跡	縄文土器・弥生土器
兀塚	高松市櫻紙町	4,680	平成 7年9月1日～ 8年3月31日	掘立柱建物跡・水田跡 ・溝跡	須恵器・土馬・鉄鏃
寺田・産宮通	大川町富田西	4,404	平成 7年8月1日～ 8月30日 7年10月1日～ 8年3月31日	堅穴住居跡・掘立柱建 物跡・溝跡	弥生土器・須恵器・土師 器・小型素紋鏡
弘田川西岸	普通寺市普通寺町	5,231	平成 7年4月1日～ 7年11月30日	堅穴住居跡・掘立柱建 物跡	弥生土器・須恵器・磨製 石劍・鉄斧
高松城跡 (西の丸)	高松市西の丸町	900	平成 7年12月1日～ 8年3月31日	礎石建物・石組暗渠・ 柵列	家紋瓦・青磁・染付磁器 ・焼製食器類

(3) 県教委事業に伴う発掘調査事業

遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構	遺物
鹿伏・中所	三木町鹿伏	2,350	平成 7年4月1日～ 7年9月30日	堅穴住居跡・土器棺・ 土坑・溝跡・壠状遺構 ・自然河川	弥生土器・土師器・石器 ・木製品
平池南	九龜市金倉町	4,000	平成 7年4月1日～ 7年6月30日	土坑・石器集積・土坑 ・自然河川・柱穴・井戸・ 溝・土器盛り	縄文土器・弥生土器・土 師器・石器・陶磁器
高松城跡	高松市玉藻町	5,000	平成 7年4月1日～ 8年3月31日	礎石建物・石列状遺構 ・柵列・井戸・溝・水溜状遺構・石垣・堀	陶磁器・瓦・木製品・銀 貨

香川県埋蔵文化財調査年報

平成 7 年度

平成 8 年 3 月 31 日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課

高松市番町 2 丁目 1 番 10 号 NTT 番町ビル

電話 (0878) 31-1111

発行 香川県教育委員会

印刷 横成光社